
ギリシャ神話異聞

Akka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギリシヤ神話異聞

【Nコード】

N4756K

【作者名】

A k k a

【あらすじ】

ギリシヤ神話の中の、ペルセポネの略奪を下敷きに勝手な解釈を加えました。ハデスに騙された・流されたという印象が強いコレーですが、そんな少女が冥府の女王になりえるのか？という疑問の元、二人の恋愛模様を書いています。正統派のギリシヤ神話しか認めないし求めない！というお方はご注意ください。

天界を統べし大神ゼウス。

地上に豊饒を与えしデメテル。

偉大なる父に慈しみの母。

どうかこの世界が平らかであるよう、お力をお授けください。

「コレー！」

コレー
娘と呼ばれて振り向いたのは、柔らかな陽の光を集めた髪と若草の瞳をした女だ。

女、というにはまだ若いかも知れない。

その身体は成熟一步手前、あどけなさど艶が混ざり合ったような、つい手を伸ばしてみたくなるような存在だ。

しかし、コレーはどの男のものになることもない。

彼女は豊饒の神デメテルの娘。

母が処女神にすると決めて大切に大切に慈しんできたことは誰もが知っている。

デメテルを怒らせてしまえば、実りはなくなる。

ゆえにコレーは絶対の庇護を与えられた存在であった。

「コレー、あちらに綺麗な花が咲いていてよ？」

ニンフがそう言うのを聞いて、コレーは踊るような足取りで立ち上がる。

「デメテル様もいらしているわ。行きましょっ？」

「お母様が？なら、道すがら花冠を作っていきましょう」
ニンフが花を摘みコレーに渡すと、コレーは器用な手つきでそれらを編み上げていく。
デメテルのもとにつく頃には、即席とは思えない仕上がりになっていた。

「お母様、お疲れではないですか？」

花冠を差し出しながら案ずる娘にデメテルは笑う。

「大丈夫よ、私のコレー。あなたは私がない間、何か変わったことは無かった？」

ニンフが口々にさすがはデメテル様の娘だと腕前を褒め称える。誰にでも温かな微笑を振りまくコレーは、人の悪意を知らない。

よってデメテルが心配し続ける理由もはっきりとは理解していなかった。

「何もないわ。お母様」

「心配なのよ。あなたが汚い男の手に触れられてはいないか。あなたの父のような……野蠻な手に」

デメテルはゼウスの強引な手段によって、コレーを授かった。愛しい娘。産んだことは全く悔やんでいない。

しかしゼウスを憎く思う気持ちは消えていない。
コレーだけはあんな目にあわせるものかと、成長していく姿を見ながらデメテルは心に決めてきた。

「心配しないで。お母様。私はいつもこの野原にいるわ。こんな綺

麗なお母様の恵が行き届いた場所で、誰も悪いことなんて出来やしないわ」
こんな穏やかな時間が、ずっと続くはずだった。
誰もがそう信じていた。

北の地に恵を届けに行くデメテルを見送り、今日もコレーは花と戯れる。

同じように繰り返してきた毎日。

きつともうすぐニンフたちがやってきて、出来上がった花冠をみてさすがはデメテル様のコレーだと誉めそやすだろう。

何かもう一つ花が欲しい。

そう思つて立ち上がったコレーの目に、一際美しい花が飛び込んできた。

真っ白な花弁の凜とした風情の花。

駆け寄つて手にしようとしたその瞬間、日が翳つた。

ぞくりと肌に染み入る冷気。
違う。

日が翳つたとか、そんなものではなく。

手から花冠が滑り落ちた。そして突如現れた大地の裂け目へ吸い込まれていく。

それにさえ気が付かず、コレーは目の前の圧倒的な存在を見上げる。

風に揺れる漆黒の長衣。

ぬばたまの黒髪。

ちらりと覗いた何よりも深い絶望の色をした瞳。

「っ……あ……」

富める者

ブルトン

名高き人

クリュメノス

良き忠告者

エルブレウス

畏怖でもってその名を人間たちはそう呼ぶ。まるで本当の名は禁忌であるかのように、避けるかのように。

恐れる神。

不吉な神。

伸ばされる腕を避けることなんて出来なかった。

ただ恐怖で固まる身体がゆっくりと浮き上がり、四頭立ての馬車に乗せられる。

何が起こっているのかわからない。

何故ここにいるのだろうか。

冥府の王。

ハデス

捉えられたことがわかって、声をあげる術を忘れてしまった。

風を切つて、というよりは風と風の合間を縫って四頭立ての馬車は走り抜ける。

あるいは風さえこの冥府の王を恐れて道を空けるのだろうか。

決して押さえつけられているわけではないのに、揺ぎ無い腕に抱えられてコレーはそんなことをぼんやりと考えた。大きく深く口を開ける洞窟の中へ、長く続く階段が続いているのにちっとも振動は感じられない。

そうか。冥界に近づけば近づくほど、ハデスの力は増すのだろう。ならば馬車とて重さなど感じずに飛ぶことさえ出来るに違いない。母でさえ地上でそんなことは出来なかった。

コレーは自分が余りに強大な存在に捕まったことを感じずには要られなかった。

完全に陽の光が届かなくなったとき、ポツリとハデスが言う。

「疲れたか」

話しかけるといふよりは独白に近いような声の調子だ。

低くかすれた声は不思議に耳に届いた。

「疲れたなら、休むがよい」

何かを口にする前に、大きな手のひらがかざされる。

それから先、コレーは記憶を失った。

地上に帰してと泣き喚き慣れない恨み言を口にしながら数日を過ごしてコレーは状況を理解した。

ハデスはコレーが目を覚ました後、一度だけ顔を見せにきたがそれ以来コレーの部屋にやってくることはない。

しかし冥府の女神であるヘカテはコレーに優しかった。

ヘカテが説明するところによると、コレーはハデスの妻として冥府に連れてこられたらしい。その婚姻自体はまだ成立していないが、ハデスの許しが必要ならば地上に戻ることは出来ない。

コレーは何故、と問い続けた。

何故自分が選ばれてしまったのか。

何故このような強引な手段に出たのか。

そしてどうしても聞くことが出来なかった問がある。

何故、ハデスは顔を見せにこないのか。

会いたいのかといわれれば、それは違う。

しかし連れてくるだけでそのまま放って置かれている状況にも納得できない。

納得がいけないといえば、ハデスの行動も妙だ。

一度だけ顔を見せたハデスだが、そのときコレーが地上に帰してと頼んだことには一切触れず、一方的に冥界の理を説明していった。

それは地上と冥界、属する場所を決めるための取り決めだ。

冥界の食べ物を口にすれば、その者は冥界に属することになる。

だから食べるならその前によくよく考えろと言いつつ残していった。

そんなことを言われなければ、コレーはいつか警戒心が空腹に負けて何か口にしていただろう。そうすればコレーは冥界に属することになり、ハデスにとっては万々歳ではないのか。

無理やり攫っておきながら、それ以降は何をするわけでもなくいてもいなくても良いような扱いだ。

「コレー様、何をお考えですか？」

眉根を寄せていたのだらう。ヘカテが心配そうに声を掛けてきた。

コレーもヘカテには心を許すようになっていたので、あまり考えることなく思ったことを口にした。

「ハデス…様というお方は、どうして私を選んだのかしら」

「分かりませんか？」

「分からないわ。あれほど力のあるお方なら、もつと冥府の女王に相応しい女神を娶ることも出来るでしょう。私なんて、ただお母様に守られていただけの子どもだわ。花を摘んでそれを編んで…それしかしてこなかったのよ」

「だからですわ」

「え？」

予想外の答えにコレーはヘカテを見上げる。

ヘカテは微笑むと、コレーを窓へ導き重い窓を開ける。

「ご覧ください」

広がっているのは荒涼とした景色だ。

春の野原しか知らないコレーは思わず眉を顰めた。

「寂しい、ところね」

「ええ。そしてハデス様はずっとここにお一人」

ヘカテはどこか寂しげにそう言った。

「私などは暇を見つけて地上へ顔を出すこともございます。とはいっても、私はそもそも地下の住人ですので、ここでの生活は苦にはなりません。むしろ地上の華やかさが痛い。」

ですがハデス様はどうでしょう」

「あのお方には、一番似合いの場所だと思うけれど」

僅かに皮肉のこもった言い方にコレー自身が驚いた。

こんな嫌味な物言いをしたことがない。

コレーはこの冥府での生活で、今まで欠落していた喜怒哀楽を覚えていた。

「そう思われますか？ハデス様はあの派手好きのゼウス様や陽気なポセイドン様のご兄弟。本当にこの生活で満ち足りていらっしやるとは思えないのです」

そう言ったヘカテの顔が複雑な色をしていたことに、コレーは気が付いていた。

しかし何と言えはいいのか皆目見当がつかない。
今までコレーの周りにいた者は、皆笑っていた。
たまに心配を覗かせるデメテルだって、コレーが笑えば笑ってくれた。

人の気持ちを押し量るのはとても難しい。

結局口を閉ざして拳を握り締めたコレーの頭をへカテは優しく撫でた。

「コレー様」

「……ごめんなさい」

「それで良いのですよ。そうやって悩んでください。ハデス様もそれをお望みです」

ハデスの望み。

それは何だろう。

同じ問いを繰り返しながら、コレーは何度目になるか分からない寝返りをうった。

常に薄暗い冥界の夜は際立って尚暗い。

初めて経験する眠れない夜にコレーは時間を持って余し部屋を出た。
誰かに会って話をして。そうすればいくらか気がまぎれるかもしれない。

靴音が響く廊下は一定の間隔で明かりが灯されていて、歩くのには

困らない。

そして気付く。

誰か、とは誰だろう。

誰と話をすれば気が紛れると考えたのだろうか。

誰もいない。

母も。

ニンフたちも。

自分の周りを彩っていた者は、誰もいない。

「……っ！」

本能的な恐怖からコレーは走り出した。

長い廊下をがむしゃらに曲がって、自分がどこにいるのかはまるで分からなくなっただけれど、それでも「ここ」にいる自分が一人だと思っよりはずっと良かった。

地上では感じなかった重みに足がもつれて息が上がる。

自分の足音だけが耳に響き、こめかみが酷く脈打った。

喉がひび割れるように痛み、心臓が限界を訴えた頃、廊下の奥に人影を認めた。

夜の暗さとは一線を画する、漆黒。

絶望と安寧の色。

コレーの足音には気が付いていただろうに、一向に視線を窓の外から動かさない。

その瞳が何を映しているのか、それが知りたくてコレーは息が整うのを待った。

「……逃げないのか」

静かな声が染み入るように響く。

誰の耳にでも届くようなものではなく、聞かせる者にだけ届けるのだと言いたげな。

「逃げる？」

また荒い息の下で、コレーは言葉の意味を問い質した。

何から逃げるといっただろう。

今この場所には二人しかいないのに。

「何から逃げる、とおっしゃるのですか」

「私から、だ」

「一体何を言っているのか。」

無理やり連れてきておいて、次は逃げるとその口で言う。勝手が過ぎる。

「最近泣かなくなった、とヘカテが言っていた。怒りは覚えたか」

「……」

「何も口にしていないらしいな。身体は大丈夫なのか」

「……」

「賢明だ。この世界に留まりたくはないだろうからな」
くつくつとハデスが笑う。

すべてを諦めきったような、乾いた笑い。

耳障りで、そのくせ心が掻き毟られるような。

「お聞きしても、よろしいですか」

ハデスは何も答ええないが、それでも良かった。

コレーの疑問に答えられるのは、ここに居るハデス以外に誰もいない。

「何故、私を」

その言葉にハデスが纏う空気が僅かに動いた。

そしてゆっくりと顔を向ける。

二人の視線は初めて正面からぶつかった。

一歩、ハデスが近づく。

思わずその分後ろに身体を引いたコレーに、ハデスは何を言うでもなく苦笑した。

「欲しいと思った。それだけだ」

「……え？」

「お前が欲しいと、そう思った。それだけだ」

「……わかりません。私には、わからない」

欲しいと思ったといわれても、そう感じられる態度ではなかった。最初の強引さが続くなら、あとは運命と諦められ流されることが出来たのに、与えられたのは賓客のもてなしと無関心だったではないか。

「そうだろうな。だから私は愚かだとへカテは言っただろう。しかしそれも終いだ。」

……明日、お前を地上に帰そう」

言葉を咀嚼するまでに、若干の時間がかかった。

あの春に帰ることが出来る。

それは間違いない嬉しくはあるけれど。

「長い間、すまなかつたな。お前には不本意だろうが…私にとっては……」

私にとつては、何だったというのだろう。

しかしその先はいくら待っても出てこなかった。

立ち尽くすコレーを振り返ることもなく、ハデスは背中を向けて去っていった。

そして迎えがくるまでずっと、コレーはその場に立ち続けていた。

まるで、答えを探すように。

翌朝、どこか寂しげなへカテが迎えにくるまでコレーは寝台の上で膝を抱えていた。

地上に帰れるというのにまったく心が晴れない。

それには間違いなく、昨晚の邂逅が関係していた。部屋を飛び出さなければ良かった。会わなければ良かった。

話なんかしなければ。

そしたらコレーのままですられたのに。

「コレー様？お仕度が……」

「お願い、ヘカテ」

縫るようにヘカテの服を掴む。

「ハデス様に、お会いしたいの」

「最後に恨み言くらい、聞いてやろう」

「ハデス様！」

ヘカテが叫ぶより早く、ハデスはコレーに宛がった部屋へ入ってきた。

「ヘルメスが早く連れて来いと急かすのでな」

その顔に昨晚窺えたような色はない。

最初のときのように傲慢で強引な冥府の王。

「あの……」

「外せ、ヘカテ」

その一言でもの言いたげであったヘカテは消えた。

「どんな恨み言も受け入れよう。それだけのことをした自覚はある」
それだけのこと、とは何だろう。

丁重にもてなされた。苦痛を与えられたわけではない。

「違います。そんなことは、関係ない」

僅かに揺れた瞳が向けられる。

ああ、やっぱり。

この人は悲しくて、何て愚かで。

傲慢で、強引な。

気が付いたときには身体が動いていた。

高い場所にある頭を引き寄せ、冷たい唇に唇を重ねる。

驚きに目を見張るハデスに、コレーは至近距離で問いかけた。

「何故、私を？」

それは昨晚と同じ問い。

しかし逃がすものかという強さが加えられていた。

「……。欲しいと思った。

デメテルの野原で花を摘むお前を見て、この暗い冥界にお前がい
たらどれほど慰められるだろうかと。この…乾いた心が潤うだろ
うか、と」

絶対に口には出さないが、この冥界に飽き飽きしていた。

それでも死者はやってくる。

裁きを下す仕事はなくなるならぬ。

そんなときにゼウスに呼ばれ仕方なく地上にでた先で、見つけてし
まった。

「届かない存在だと思おうとした。どうせ不幸にするだけだ、と。

だが……」

そこでハデスは言葉を切った。

情けない真情を隠せるものなら隠しておきたい。

しかしコレーの若草色の瞳は、無言で続きを促していた。

「攫ってしまったえば、デメテルが強硬手段にできることは分かっていた。
だからそれまでの間に…少しでもお前が心を許してくれるなら、と」
地上ではデメテルが豊饒の仕事を放棄し、あちこちで飢饉が続いて
いる。

そうなれば大神ゼウスいえど無視は出来まい。最初から時限付きだ
と分かっていた。

「だから…私に、食べ物の説明を？」

口にしてしまえば冥界に属することになる。

本当は何も言わずにいようかとも思った。
しかし。

「浅はかだな、私は。お前に。自ら選んで欲しいなどと」

それだけ聞けばもう十分だった。

次は、コレーが言わなければならない。

「私…ずっとお母様デメテルの娘と、呼ばれていました。ハデス様に攫われて初めてお母様の庇護から外れて、自分の物差しでものを見て…とても難しかった。私には何も出来なかった」

ハデスは何も言わない。ただ、黙って話の終着点を見定めている。

「悩みました。一晩中悩んで、それでも分からないんです。だから

……」

コレーはハデスの腕から抜け出すと、籠の中の石榴を手を取った。

中には12粒。その中から4粒を手のひらに取り出す。

「一年のうち、この間だけ。そう…3分の1だけ、冥界で過ごしませ。そこで答えを見つけない」

「…待て！」

ハデスが止める隙もなく、コレーはそれを飲み込んだ。

喉を石榴が落ちていくと同時に、身体の中でそれを拒否する動きと受け入れる動きがぶつかり合う。

焼け付くような痛みが引くと、呆然とするハデスにコレーは出来る限り優しく微笑んだ。

「名前を下さい」

「何をしたのか分かっているのか！？デメテルの下に帰れなくなる！」

「いいえ。ハデス様さえ認めてくだされば、帰れます」

「何をしたのか、わかっているのか？」

落ち着いた様子のコレーをハデスは信じられないといった目で検分する。

「はい」

「私は、口にした石榴の分はお前を手放すことはしない。分かっているのか？」

「ええ」

「私の妻になり冥府の女王となることだと、分かっているのか!？」
「…はい。あなた」

混乱し続けるハデスの頬に触れて、ゆつくりとコレーは繰り返す。

「分かっています。ですから、冥府の女王に…あなたの妻に相応しい名前を下さい。娘^{コレー}ではなく、あなたの横にあるための名前を」
ハデスはゆつくりと目を閉じると、コレーをきつく抱きしめた。
痛みさえ感じる強さだったが、それを深いには思わなかった。

「…ペルセポネ」

「ペルセポネ《光を奪う女・破壊者》？」

「そうだ。冥府の女王に、相応しい」

「ペルセポネ……」

新しい名前を噛み締めるように繰り返す。

「ゼウスとデメテルの娘コレーは、あなたの妻にして冥府の女王ペルセポネとなりましょう。」

地下から地上へあなたの安らぎをもたらしましょう。そして地上からあなたに春の華やぎを届けます」

「ペルセポネ……！愛している。この思いだけは、裏切ることはないと信じてくれ」

「はい」

頬に添えられた大きな手に歯向かうことなく上を向く。

漆黒の瞳を冷たい色だと思つことはもうないだろう。

これまでに暮らした環境が違うなら、理解できないこともあるだろう。

しかしそれでも。

「愛しています。これからは」

再び重なった唇は、痺れを切らしたヘルメスが迎えにくるまで離れ

ることはなかった。

(後書き)

ちゃんと自分で考えて行動したペルセポネが書きたい！という欲求で書きました。

もうちょっとハデスについて書き込みができるようになったのですが、気力が続きませんでした。

コレーが攫われるまでにはゼウスのいらんちよっかいかがありませんが、そのあたりは省略しました。恋愛劇に父親が出てきてまともな事態にはなるまい。

でも怒り狂うデメテルは書きたかったかも。うーん。

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4756k/>

ギリシャ神話異聞

2010年10月12日05時46分発行